日本オリエント学会だより

1）第65回年次大会　　2）学会奨励賞　　3）作文コンクール
4）入会・復会　　5）会員消息

1）　第65回年次大会

期　日：2023年10月28日（土）～29日（日）（28日の公開講演会は対面・オンライン併用）
会　場：大阪大学箕面キャンパス
担　当：第65回大会実行委員会
委 員 長：山根聡
事務局長：福田義昭
委　　員：岡崎英樹，小澤一郎，杉山雅樹，竹原新，中村菜穂，宮下遼

第１日　10月28日（土）
14：00～　開会挨拶
14：10～　第332回公開講演会
17：00～　第45回オリエント学会奨励賞授賞式

第２日　10月29日（日）
10：00～14：55　研究発表

参加者　91名（第1日）
104名（第2日）

プログラム

第１日　第332回公開講演会　外国学研究講義棟1階・大講義室（対面・オンライン併用）
『変成するオリエントの物語――古代から現代へ』
・小林薫（国際基督教大学・非常勤講師）
「カドモスとオイディプス，フェニキアとテーバイ――文学的トポスとしてのオリエント」
・山中由里子（国立民族学博物館・教授）
「マンドレイクの根を抜く術――『ユダヤ戦記』から『ダンジョン飯』まで」
・藤元優子（大阪大学・名誉教授）
「現代イラン小説に映る古代ペルシアの光と影」

第２日　研究発表　5部会　外国学研究講義棟5階（501，502，523-524）および6階（603，628-629，632）

研究発表者・題目

第１部会

1.　河江　肖剰　　クフ王のピラミッドの内部構造の複雑さに関する考察
2.　森島　邦博・北川　暢子・ScanPyramids
宇宙線イメージングによるクフ王ピラミッドの切妻構造背後の新空間の調査報告
3.　進藤　瑞生　　エジプト新王国時代のサッカラ遺跡における非エリート層の墓域形成に関する一試論
4.　和田浩一郎　　アコリス遺跡出土のヒト形小像再考
5.　北川　千織・カール　ヨヘム
ゲベル・アシュート・アル・ガルビ遺跡における動物埋葬

6. 河合　望　北サッカラ遺跡のグレコ・ローマン時代のカタコンベとその周辺の調査について：第6次・第7次北サッカラ遺跡調査概報
7. 岡部　睦　グレコ・ローマン時代のエジプトにおけるテラコッタ製「女神」像の展開をめぐって：属性分析を中心に

第2部会

1. 堀岡　晴美　南メソポタミア初期王朝期IIIa, b期年代設定に関する問題点
2. 川上　直彦　テル・シンカーにおけるシュメール初期王朝時代とアッカド王朝時代の土器編年に関する考察：1950年代後期のR. McC. Adamsの見解の再構築
3. 村井　伸彰　海の国第一王朝のマルドゥク信仰：中期バビロニアとの比較
4. 西山　伸一　アッシリア帝国の地方拠点都市におけるエリート層邸宅：イラク・クルディスタン，ヤシン・テペ遺跡出土の事例を中心に
5. 伊藤　早苗　アッシリア帝国における *ša qurbūti*
6. 常木　麻衣　古代メソポタミアにおける大英博物館所蔵の分銅に関する一考察
7. 徳永　里砂・アブドゥルイラーフ　アルファーリス・アブドゥルムフセン　アルムニーフ　サウジアラビア北西部アラカーンにおける古代北アラビア文字・ナバテア＝アラビア文字併記碑文の発見
8. 西藤　清秀・板橋　悠・岡崎　健治・大藪由美子・鈴木　朋美・岩越　陽平・吉村　和昭　バハレーン，ティロス期マカバ古墳群の被葬者像

第3部会

1. 下山　繁昭　インド仏教の中心的存在であった飛鳥の川原寺は何故移転しなかったか
2. 田中　延和　古代クシュ王国における戦争と女性
3. 関広　尚世　メロエ遺跡出土「用途不明品」の重要性：金属製品を中心として
4. 長尾　琢磨　ローマ時代ユダヤ地方におけるユダヤ人の離散状況：ラマッラー～ナブルス間（パレスチナ自治区）の考古学的調査から
5. 佐藤　育子・丸小野壮太　歴史学と歴史教育の対話から考える「開かれた古代地中海世界史研究」
6. 五十嵐小優粒　自他動詞の派生関係をめぐるペルシア語の特異性
7. 榮谷　温子　クルアーンにおける疑問文の機能

第4部会

1. 青木　健　アーザル・カイヴァーン学派の源流：デリー・スルターン朝時代の古代イラン語とウズワーリシュン
2. 宍戸　遥弥　サファヴィー帝国エスマーイール2世期の政治展開：16世紀後半「第二次内乱期」の実相解明の一端として
3. 守田まどか　18世紀イスタンブルのシャリーア法廷と法廷業務の集権化
4. 大塚　修　ガージャール朝ペルシア語普遍史書研究序説
5. 中道　静香　ミシェル・サッバーグによる3つの『千夜一夜』写本とその編纂過程
6. 村上　武則　近代クルド学の父オルベリとソヴェト・ロシア
7. 藤本あずさ　現代トルコにおける若者とスピリチュアリティ

第5部会

1. 企画セッション：ポスト・イブン＝スィーナー期の哲学，神学，医学
   - 小林　春夫　　ポスト・イブン＝スィーナー研究とその意義
   - 加藤　瑞絵　　ガザーリーと哲学
   - 宮島　　舜　　イブン＝スィーナー哲学の批判と継承
   - 橋爪　　烈　　薬学書伝統における『医学典範』第二巻の位置づけ
   - 矢口　直英　　イブン・スィーナー『医学典範』の注釈書研究
2. 法貴　　遊　　アブー・フサイン・バスリーのエピステモロジー
3. 原　　陸郎　　イブン・カイイム・ジャウズィーヤのズィクル論
4. 澤　　裕章　　*Jawāmiʿ*と*Jumal*：「アレクサンドリア集成」『原因と症状について』のテキスト伝播に関する考察
5. 中西　悠喜　　モッラー・ファナーリーにおける神名，人間，星辰魔術

第1部会

1.　クフ王のピラミッドの内部構造の複雑さに関する考察　　**河江　肖剰**

古王国第4王朝に建造されたクフ王のピラミッドは，エジプト最大である大きさだけではなく，その内部構造の複雑さからも特異な王墓として注目されてきた。ピラミッド内部には地下約30mに位置する未完成の「地下の間」，地上約21mにある「女王の間」と呼ばれる部屋，約43mには石棺が置かれた王の埋葬室である「玄室」，その上には五重の櫓状の「重量拡散の間」がある。さらに「大回廊」と呼ばれる持送り式構造で作られた巨大な空間や，部屋や通路を結ぶ「下降通路」，「上昇通路」，「水平通路」が存在している。加えて近年，素粒子ミューオンを用いて内部を透視する国際調査プロジェクトScanPyramids Missionによって，大回廊の上に同様の大きさの空間や北面入口の切妻構造の裏にも空間が検出され，今年初春には，後者にファイバースコープが入れられ，目視による確認にも成功している。

大ピラミッドの内部構造の複雑さの理由は明らかになっていないが，現在大きく分けて二つの説がある。ひとつは整合性のある計画で建設されたという「単一計画」であり，ライナー・シュタデルマンによれば，初期王朝から象徴的または宗教的な理由で「三室システム」で王家の墓を建設していたという。もうひとつは「計画変更」されたというもので，その理由は構造欠陥だけでなく，革新や改良，または思想の変更の結果としている。古くはフリンダース・ピートリーやルートヴィヒ・ボルヒャルト，近年ではフランク・モニールなどもこの説を支持している。

本発表では，2022年に遺跡や自然環境の調査解析とデジタルアーカイブを行うWorld Scan Project Inc.のと共同研究で取得した大ピラミッド内部の3Dデータを元に，この複雑さについての考察を提示した。この際，これまであまり注目されてこなかった各空間の切り合い関係に着目しつつ，新しく発見された空間の位置と未完と思われるその構造を他の空間と関連付け，大ピラミッド全体の内部構造の発展段階を明らかにすると共に，ピラミッドの建造方法についても新たな知見を提供した。それによって，大ピラミッド内部は計画変更された可能性が高く，なおかつその建設順序も従来考えられていたものとは異なっていたことが示された。

参照文献

G. Dormion. 2004: *La Chambre De Chéops: Analyse Architecturale*. Etudes D'égyptologie. Paris: Fayard.

M. Lehner & Z. Hawass. 2017: *Giza and the Pyramids*. Chicago: University of Chicago Press.

V. Maragioglio & C. Rinaldi. 1967: *L'architettura Delle Piramidi Menfite - Parte IV La Grande Piramide Di Cheope*. Torino: Tip. Artale.

2.　宇宙線イメージングによるクフ王ピラミッドの切妻構造背後の新空間の調査報告

森島　邦博・北川　暢子・ScanPyramids

3.　エジプト新王国時代のサッカラ遺跡における非エリート層の墓域形成に関する一試論　　進藤　瑞生

本発表では非エリート層の墓域形成を解明する一端として，中でも豪奢な墓祠堂などを持たず，僅かな副葬品の簡素な埋葬である「単純埋葬」に着目し，埋葬場所の選定と埋葬観念の関係性を明らかにすることを試みた。分析に先立ちまず，社会階層の既往研究に依拠し非エリート層を下級官僚，書記官，労働人口（兵士･小作人など），放逐者と定義した。次に「単純埋葬」の既往研究における主要テーマとして埋葬習慣の多様性・類似性や墓域の選定･展開を概観し，墓域の展開に伴い埋葬習慣が類似する，しない墓がどう形成されたかという問題設定を行った。

分析方法として，まず対象資料をサッカラ遺跡テティ王ピラミッド北部の67基とした。次に時期区分として資料数に応じて便宜的に第18王朝トトメス4世までを第1期，その後を第2期と区分した。分析手順として統計ソフトRのウォード法に基づき，埋葬方法（頭位方向・軸線・埋葬姿勢）と副葬品（組成・出土量）の属性で墓同士の類似度を数値化・クラスター分析を行い類似する埋葬習慣の墓をグループ化した。そして墓同士の距離と各墓が属する埋葬習慣のグループの相関を観察し各時期のグループの空間的変遷を分析した。

分析の結果，墓域として継続的に利用された北西区，北東区に対し南区の多数は第2期から造営されていた。区ごとに着目すると第1期は埋葬方法と副葬品の関係にそれぞれの墓で一貫性が無いのに対し，第2期は北西部で埋葬と副葬品の組み合わせに一貫性がみられる。また第1期で北西・北東部でみられたアミュレット，装身具，化粧品の副葬品を志向するグループや北西部でみられた側臥の埋葬グループが第2期では南区に集中する傾向を見出した。

分析結果を踏まえ従来指摘された家族単位に継承される「小伝統」と経済性による埋葬習慣の多様性を根拠に「単純埋葬」の墓域において第1期では異なる家族間，経済性を持つ非エリート層全体が「自己組織」的に造営したのに対し，第2期で経済性と埋葬観念の組み合わせの固定化と空間的な棲み分けが進み経済，埋葬観念に応じた秩序化が起こったと考察した。またその背景としてアマルナ・ポストアマルナ以降に単純埋葬の墓域に重複する北東部の立地で大型の貴族墓，エリート墓が造営されたことに着目し，この墓域で造営場所などの管理・運営や景観の整備が重要視され「単純埋葬」の南部への展開や「自己組織化」からの脱却を促したと結論付けた。

4.　アコリス遺跡出土のヒト形小像再考　　和田　浩一郎

中部エジプトのアコリス遺跡南区では，第三中間期から末期王朝時代に年代付けられるヒト形の土製小像が多数出土している。大きな頭部と簡略化された四肢，胴部前面に1～4つの円形突起を持つこの資料群は，他遺跡での明確な出土例が認められないユニークなものである。当該資料については，すでに花坂哲が包括的な観察・記録と機能についての考察を行っている。花坂は突起が胴体の中央付近に付けられる例が多いことからこれを「へそ」の表現と見なし，四肢の不明瞭さ，性別の不明瞭さを根拠に，乳幼児を表現したものと解釈した。そして小像の機能として，子供の無事な成長を願う，形代の役割を果たしたものである可能性を提示した。

本発表では花坂の研究を踏まえて，ヒト形小像の再検討を行った。着目したのは小像の①破損状況，②全体の形状，③彩色の痕跡である。現在までに出土している84点の小像に完形のものはなく，すべて頭部に目立った損傷が認められる。頭部は芯になる突起に粘土を巻き付けた，しっかりした造作である。そのため花坂が指摘しているように，意図的な損傷が加えられたと判断できる。小像は頭部が大きく表現されており，この部位の造作に意味が込められていたと判断される。またいくつかの小像には，胴体前面だけに赤色の横線が引かれていることが確認できる。横線は複数引かれている例もあるが，いずれの場合も首元から下に位置している。

これらの特徴から，発表者はアコリス遺跡のヒト形小像を，古王国時代以降に知られる呪詛人形（execration

figure）の系譜に連なる資料と推測した。呪詛人形は後ろ手に縛られた捕虜の姿を表現しており，正面から見た場合の外形がアコリスのヒト形小像と類似する。頭部が破損した呪詛人形は管見では認められないが，頭頂部に打痕のある例がいくつか報告されており，呪詛の際に頭部に打撃を加える所作があったことが分かる。胴体前面の赤線の類例としては，人物の首に赤色の横線が引かれている呪詛タブレット（捕虜の姿を型押した粘土板）が挙げられる。また新王国時代以降の大蛇アペピの図像表現では，胴体の複数箇所に赤色のナイフが描かれている。これらの表現から，赤色の横線は頭部や胴体の切断を意味するものだった可能性を示した。

結論として第三中間期のアコリスで呪詛儀式が行われていたと推測したが，呪詛が行われた社会背景については，さらに考察を行う必要があると考えている。

5.　ゲベル・アシュート・アル・ガルビ遺跡における動物埋葬　　北川　千織・カール　ヨヘム

古代エジプトの宗教において動物は重要な位置を占めていた。古代アシュート（リュコポリス）では，ウェプワウェト神，アヌビス神，ハトホル神，トト神などが崇拝されており，動物の埋葬はこれらの神々の崇拝と関連していた。ゲベル・アシュート・アル・ガルビ遺跡は，アシュートの街と西方沙漠の境界にあり，ゲベル（山）は古代から様々な活動に利用されている。人間や動物のネクロポリス，神殿，採石場，祈りの場，軍事施設などが確認されている。またゲベルは遠足の地，教育の場でもあった。

The Asyut Projectは2003年からゲベル・アシュート遺跡の調査を行っており，現在はドイツ・エジプト・ポーランド・日本の共同調査となっている。これまでの調査により，宗教実践に関連して動物ミイラ，関連動物遺体，土製動物小像，ステラ，その他の遺物がゲベルやその周辺に奉納され検出された。紀元前2千年紀から紀元前1千年紀にかけて，イヌ科，ネコ科，ウシ，ヒツジ，トガリネズミ，鳥類，ワニなど様々な動物を埋葬した遺構がゲベルに点在していたことが判明しつつあり，出土した動物の生前･死後の状態や関連遺物と併せて考察を行った。

6.　北サッカラ遺跡のグレコ・ローマン時代のカタコンベとその周辺の調査について：
第6次・第7次北サッカラ遺跡調査概報　　河合　望

金沢大学を中心とする日本・エジプト合同北サッカラ調査隊は，サッカラ遺跡において新王国時代の未確認の墓地を調査するため，2015年より踏査を開始し，2017年に従来未発掘であった北サッカラ台地の東側斜面で試掘を行った。2019年の第5次発掘調査では，グレコ・ローマン時代の中でも紀元前1世紀から紀元後1世紀に年代づけられるカタコンベ（地下集団墓地）を発見した。その後，2023年2月～3月の第6次調査にて内部の記録を行い，2023年8月～9月の第7次調査より内部のクリーニングを開始した。また第7次調査ではカタコンベ周辺の発掘調査にも着手し，初期王朝時代，新王国時代，末期王朝時代，グレコ・ローマン時代の埋葬遺構を検出した。本発表では，これら第6次・第7次調査の成果の概要を報告した。

カタコンベは，全長約9メートルのヴォールト天井をもつ日干レンガ製の下降階段，全長約15メートルの岩盤に穿たれた通廊および複数の側室，シャフトから構成されており，発見当初は入口が日干レンガで封鎖されていた。入口付近には風成砂層が堆積しており，堆積表面にも複数の人骨が検出されたことからカタコンベは長期にわたって継続的に使用されたと考えられる。カタコンベの北壁には少なくとも3つの側室と1個のステラの壁龕が確認され，南壁にも3つの側室と1個のタブロー，3個のステラが確認された。側室のうち2つには表面に壁画が描かれていた。遺物は主に土器，カルトゥナージュ・マスク，テラコッタ製像が出土した。

カタコンベ周辺の発掘では，発掘区の斜面上方より初期王朝時代の日干レンガ製マスタバ墓，新王国時代，末期王朝時代，プトレマイオス朝時代の土壙墓が複数検出された。また，おそらく末期王朝時代に年代づけられる大型シャフトの存在も確認された。カタコンベの南側での発掘調査では，斜面に第18王朝初期のリシ棺の埋葬をはじめとする新王国時代の土壙墓とグレコ・ローマン時代の土壙墓が検出され，岩盤の露頭から初期王朝時代第2王朝頃の岩窟墓がほぼ未盗掘の状態で検出された。この岩窟墓の遺体は箱形の木棺の中に屈葬で埋葬されて

おり，北サッカラ遺跡における最初の発見例である。

以上のように，北サッカラ台地の東側斜面の発掘区はわずかな面積ではあるが，初期王朝時代からグレコ・ローマン時代までの約3000年間に断続的に墓地として使用されていたことを示唆する考古学的証拠を得ることができた。

7.　グレコ・ローマン時代のエジプトにおけるテラコッタ製「女神」像の展開をめぐって：属性分析を中心に

岡部　睦

発表者はエジプトのテラコッタ製「女神」像の形態変化からグレコ・ローマン時代におけるエジプトとギリシア・ローマ文化の融合の様相を明らかにすることを目的に，これまでにテラコッタ製「女神」像を構成する目の表現や髪型，衣装，頭部装飾，姿勢，アトリビュート（持物）などの属性の形態分析を通して対象資料の年代的な差異を検討してきた。本資料の年代変化は特に髪型などの属性に現れることが明らかとなった一方で，頭部装飾やアトリビュートの詳細な種類は女神像の姿勢によって異なることから，より精緻な属性分析を行うためには女神像の姿勢ごとに分析を行う必要がある。

テラコッタ製「女神」像の姿勢は直立した姿で表される所謂「裸の女神」や，衣服の裾を上げ，女性器を露出させる「アナシルマ」，双方を組み合わせた「直立アナシルマ」，両手を広げた姿の「オランス」などが挙げられる。これらのうち「裸の女神」と「アナシルマ」に関しては，これまでにM. フィンク（Fink）がディオドロスやヘロドトスが記述したエジプトの慣習の例を用い，意味論の視点から双方の関連性を指摘しているほか，「直立アナシルマ」を「アナシルマ」の亜種として示した（Fink 2008, 2009）。一方で女神像の形態そのものを対象とした体系的な分析が必要であることから，本発表では出土遺跡が明らかな「裸の女神」と「アナシルマ」，「直立アナシルマ」を分析対象に，頭部装飾や衣装などの属性の形態分類や出土傾向の視点から本資料の展開と地域性の解明を試みた。

分析の結果，「裸の女神」は紀元前3世紀～紀元3世紀にかけて，デルタ地帯からナイル渓谷において広く出土しているのに対し，「アナシルマ」や「直立アナシルマ」は比較的テラコッタ製像の検出数の多い遺跡から出土する傾向が見られた。また，フィンクが指摘するように「裸の女神」から「アナシルマ」へと変化する傾向を形態分析から再確認し，中でもテル・アトリブ遺跡出土資料においては「アナシルマ」と「直立アナシルマ」の年代的な変化が認められた。さらに「裸の女神」から「アナシルマ」，「直立アナシルマ」へと展開する中で，頭部装飾の属性の形態に遺跡間での差異が確認できた。

参照文献

Fink, M. 2008, ““Nackte Göttin” und Anasyroméne: Zwei Motive-eine Deutung? (1. Teil),” *Chronique d’Égypte* 83, 289–317.

Fink, M. 2009, ““Nackte Göttin” und Anasyroméne: Zwei Motive-eine Deutung? (2. Teil),” *Chronique d’Égypte* 84, 335–347.

第2部会

1.　南メソポタミア初期王朝期IIIa, b期年代設定に関する問題点

堀岡　晴美

本発表では南メソポタミアの年代設定に関する問題点と修正結果を示し，Tell Fara出土文書年代確定のための布石とする。

文献学においては南メソポタミアの初期王朝期（＝ED）III期を「ファラ期」（Fara出土文書群に依る）と「プレサルゴン期」（Lagaš第1王朝の王碑文・経済文書）に分け，前者をED IIIa期（前2600～前2500年），後者をED IIIb期（前2500～前2350年）として考古学の時代区分にあてはめる。このような年代区分の根底にはパレオ

グラフィーに基づいて書記術が前者から後者へと一直線に発達したという考え方がある。南メソポタミアの編年は地域の異なるDiyala地域に基づくものである。のちにDiyalaの編年の見直しが進みED IIIb期は短い事が分かり，南メソポタミアでもNippurなどの調査からED IIIb期は非常に短いか存在しない事が判明する。土器を基準にする考古学編年と文献のそれとの間に齟齬が生じるだろう事は予測できるが，150年間とする文献学のED IIIb期は考古学に対して長すぎるのではないだろうか。

NippurのInana神殿VII層はVIIB層がED IIIa期，VIIA層がED IIIb期とされる。VIIB層は出土した石製奉納容器・小像の碑文に刻まれる人名の多くがFara文書の人名と一致するためFaraとの関連性が指摘されている。VII層より上になるがIV層の下の瓦礫の中からED IIIb期Urukの王Lugal-kiĝine-duduの建設碑文が出土し，Lugal-kiĝine-duduがVIIA層建設者と考えられる。またVIIB層の外郭が直線であるのに対しVIIA層のそれは曲線に変わる。Lugal-kiĝine-duduはLagashのEnmetenaの同盟者であり，彼はEnmetenaの父Enanatum 1世がInana女神に捧げた楕円形聖所Ibgalに倣ってVIIA層楕円神殿を再建したのだろう。VIIA層Inana神殿建設時期はEnmetenaの頃であり，Fara文書との関係が深いVIIB層はEnmetena直前か治世半ばまで年代が下がる。さらにFaraとLagašにしか見られず，その使用が短期間に終わった精錬銀を表す用語ku_3-luḫ-ḫaに焦点を当てると，Faraでは不動産売買契約文書においてurudu（銅）使用からku_3-luḫ-ḫaへと移行し，LagašではEnmetenaの時にku_3-babbar$_2$（銀）からku_3-luḫ-ḫaへと移行する。おそらく両都市でのku_3-luḫ-ḫa使用時期は重なるに違いない。

以上からつぎのような結論が導かれる。①Nippur Inana神殿VIIA層をED IIIb期とするのが正しければ，Lagašに置き換えるとEnmetenaからIriKAginaまでがED IIIb期で，その期間は50年前後となる。②Fara文書がED IIIa期である事は間違いないが，Lagaš第1王朝初代Ur-Nanšeの直前に終焉したのではなく，少なくとも第5代Enmetenaの頃まで作成されていた。

2. テル・シンカーにおけるシュメール初期王朝時代とアッカド王朝時代の土器編年に関する考察：1950年代後期のR. McC. Adamsの見解の再構築

川上　直彦

紀元前2300年頃，古代メソポタミアにおいてアッカド王朝が人類史上初の統一国家を建設し，その中心都市として古代都市「アガデ」が創設された。近年，発表者は楔形文字史料が包含する地理情報，数値標高モデル（DEM）データ，及び衛星画像・写真を，地理情報システム（GIS）を介して分析し，イラクの首都バグダードから北部52キロに位置するテル・シンカーの遺丘を「アガデ」に推定する新説を発表した。同遺丘は，1956–1957年に米シカゴ大学のR. McC. Adamsによる簡易な地表面調査から採集した土器片の型式学的観点から，大枠でシュメール初期王朝時代から次のアッカド王朝時代に年代付けられている。彼が同遺丘の編年構築のため定義した型式学的特徴を持つ土器片は11種類ある。しかし，これらの土器片と同遺丘の地表面から採集した土器片に関する詳細は公表されていない。また，Adamsの調査以降，同遺丘の調査は一度も行われていない。

本発表ではこれら11種類の土器片の詳細を明らかにする目的で，Adamsがこれらの土器片の型式学的特徴を定義付けするため準拠した，1952年に米シカゴ大学のP. Delougazが発表した土器標本と実測図との比較検証を試みた。その結果，アガデが都市として居住されていた可能性が高いシュメール初期王朝時代第III期からアッカド王朝時代末期に年代付けられる土器片は，1950年代後期において5種類であったことが明らかになった。これらは，①広口の円すい型椀の底部土器片，②フルーツ・スタンドのお皿口縁部の土器片，③三角形及び基盤の目状の切込み模様の装飾がある土器片，④リッブ・ウェアが施された土器片，⑤注ぎ口の付いた大型椀の土器片となる。また，1950年代後期におけるこれらの土器片の相対年代は，①と③が主としてシュメール初期王朝時代第III期，そしておそらくProtoimperial期とアッカド王朝時代，②が主としてシュメール初期王朝時代第II期からIII期，そしておそらくProtoimperial期，④がシュメール初期王朝時代第III期からアッカド王朝時代後期，そして⑤がアッカド王朝時代後期からグティまたはウル第III王朝時代に年代付け可能であると定義されていた。もしテル・シンカーが本当に「アガデ」であるならば，これら5種類の型式学的特徴を持つ土器片がその地表面

に散在している可能性が非常に高いとの結論に至った。

3.　海の国第一王朝のマルドゥク信仰：中期バビロニアとの比較　　村井　伸彰

本発表は海の国第一王朝（紀元前15世紀）のマルドゥク信仰の特徴を論じる。発表者はカッシート王朝（紀元前14–13世紀）の史料を主に扱っていたが，そこに*arād šarri* “王の下り”，*elē šarri* “王の上がり” という表現が見られ，これがマルドゥク信仰に関連があるように思われた。この重要なイベントを理解するためには他の時代のマルドゥク信仰を把握する必要があると思ったのが本研究の動機である。紀元前2千年紀のマルドゥク信仰の研究（Sommerfeld 1982）は既に行われているが，そこに海の国第一王朝の史料（Dalley 2009）は含まれていない。そこで海の国第一王朝の史料に焦点を当て，そのマルドゥク信仰を他の時代と比較することにした。

2023年7月のシュメール研究会（京都）で，海の国第一王朝とそれに先行する古バビロニア王朝（紀元前19–16世紀）との比較を行い，古バビロニア王朝のマルドゥク信仰に比べ海の国第一王朝のマルドゥク信仰は限定的であったという特徴を示した。本発表では海の国第一王朝の後に続くカッシート王朝とイシン第二王朝（紀元前12–11世紀）との比較を行った。カッシート王朝のマルドゥク信仰の特徴は地域的に南部にまで広がっていること，マルドゥクが神々の主人（*Bēlu*）であるという観念が人名に散見されることが挙げられる。イシン第二王朝のマルドゥク信仰の特徴はマルドゥクが神々の主人であるという観念が人名のみならず，王の碑文（クドゥッル）にも見られるようになったということが挙げられる。このように海の国第一王朝のマルドゥク信仰が限定的であったにもかかわらず，後に続く時代のマルドゥク信仰は非常に盛んであったということが明らかとなった。海の国第一王朝はバビロニア王名表（古バビロニア王朝，海の国第一王朝，カッシート王朝，イシン第二王朝）に含まれているが，本研究の知見から判断すると，その理由は宗教的（マルドゥク信仰）なものではなかったと思われる。

Dalley, 2009, *Babylonian Tablets from the First Sealand Dynasty in the Schøyen Collection*, CUSAS 9.
Sommerfeld, 1982, *Der Aufstieg Marduks*, AOAT 213.

4.　アッシリア帝国の地方拠点都市におけるエリート層邸宅：
イラク・クルディスタン，ヤシン・テペ遺跡出土の事例を中心に　　西山　伸一

アッシリア帝国（新アッシリア）（紀元前10–7世紀）は，「世界最古の帝国」と称されるが，その支配構造の実態についてはいまだ多くの不明点を抱えている。その1つは，帝国の中央部の王都と地方都市との相互関係である。楔形文字文書等の文献史料による研究から中央部と地方の支配構造についてはその一部が明らかになりつつあるが，考古学による物質文化から見た支配構造の解明についてはまだ研究の初期段階にあるといえる。

このような状況下，中部大学調査団は，2016年よりイラク共和国クルディスタン地域スレイマニヤ県に位置するアッシリア帝国の拠点都市ヤシン・テペ遺跡の考古学調査を開始している。このYasin Tepe Archaeological Project（YAP）の研究課題の1つに，「物質文化からみた地方における帝国の支配構造の解明」がある。本発表では，この課題に関わるエリート層の邸宅に着目した。

ヤシン・テペ遺跡では，2016–2017年の調査でエリート層の大型邸宅が「下の町」で発見された。この邸宅は，王都アッシュールの「Rote Haus」と最も類似するプランをもつが，ローカルな特徴も兼ね備えている。Reception Suiteと呼ばれる大広間をもつ邸宅や宮殿は，アッシリアの他の王都（ニムルド，ドゥル・シャルキン，ニネヴェ）でも確認できるとともに，シリアのテル・アハマル，ジンジルリ，アルスラン・タシュなどでも見ることができる。このうち，宮殿ではない大型邸宅の事例としては，テル・アハマルのMiddle TownとLower Townで出土した邸宅がヤシン・テペの事例と類似している。

総じて地方都市でのこの種の邸宅の出土事例は限られており，いずれもアッシリアの拠点都市であることは注

目に値する。またヤシン・テペの事例は，アッシリア中央部からみて最も東に位置するものとなっている。2023年に新たに発見されたReception Suiteをもつ邸宅から，ヤシン・テペの「下の町」には複数の大型邸宅が存在したと考えられる。また，アッシリア風建築の強い影響を受けていることは間違いないが，その建築様式には，厳格なものがあったわけではなく，その地方の材料や自然環境に適応して建造されたと考えられる。このため，地方によってローカルな様式が存在することとなった。

前8世紀以降に地方の拠点都市に波及したアッシリアの建築様式は，アッシリア帝国のアイデンティティーの一部であったと考えられるが，今後は，出土遺物も含めたさらなる詳細な研究が必要と考える。

5.　アッシリア帝国における*ša qurbūti*　　伊藤　早苗

前1千年紀前半西アジアのほぼ全域を支配したアッシリア帝国における*ša qurbūti*という称号は，その原語であるアッカド語の意味 “(he) of the closeness; (he) who is close” を汲んで，State Archives of Assyriaシリーズでは “royal bodyguard” と訳されてきた。しかしながら近年，「代理人，仲介者」と訳したり，役職名ではなく尊称であり「王室の腹心」であると指摘したりする研究もある。そこで本発表では，アッシリア王碑文や首都ニネヴェの王室文書庫出土の実務文書で言及される*ša qurbūti*を検討し，彼らの具体的な役割を明らかにすることを目的とした。

*ša qurbūti*は称号だけで言及される例が80点，人名を伴って言及される例が190点存在する。これらのうち年代が記されている史料の最も早いものは前722年，最も遅いものは前612年である。そして王室書簡や様々なリストから王の*ša qurbūti*だけでなく，皇太子や皇太后の*ša qurbūti*も知られている。*ša qurbūti*はアッシリア王が昇進させ，元々アッシリア人の中から選ばれていたが，後に外国人も対象となった。*ša qurbūti*の副官，歩兵指揮官，調馬師，騎兵，偵察者，使者が言及されているが，*ša qurbūti*独自の組織が存在したかは不明瞭である。*ša qurbūti*の役割として，王や皇太子の書簡や口頭のメッセージを伝え，これらを至急に伝達するため「王の道」を通り宿駅毎にラバを乗換えし，地方で外交官として振る舞い，王室の貴石や貴金属を運び，軍隊や逃亡者をエスコートし，馬を輸送し，建築作業・儀式・織工への監督を務め，時に税を徴収し，宮廷の廷臣として割当を受け取り，軍関係の人物たちの私的契約の証人となり，裁判官や判決の証人を務めた。アッシリア王センナケリブ（在位前705–681年）の王碑文は，彼の軍事遠征に*ša qurbūti*が前697年と前694年に参加したことを記録している。

6.　古代メソポタミアにおける大英博物館所蔵の分銅に関する一考察　　常木　麻衣

アッシリア・コロニー時代の交易システムから，アッシリア商人は，アッシュールからアナトリアへ錫と毛織物を輸入し，その儲けとして銀や金をアッシュールへ送っていたことがわかっている（Gerstenblith 1983, Table 2）。当時の売買において，モノの重さは欠かせない要素であり，モノの価値は銀の重さに換算されることが多かった。また，当時の商人は，交易品を計測するために分銅を携帯したことがわかっている。これら分銅の質量は，実際にキュルテペのカールム・カニシュ区域から出土したものを計測してみると，実グラム数にバラツキがあることがわかっている。このバラツキについては，北シリア，北イラク，南イラク等の異なる地域の重さの基準が採用された結果であると考えられている（Kool 2012, 44）。今年度の調査目的は，分銅を現代の手法で計測することで，正確な定量的データを入手することである。

まず，2023年9月に英国の大英博物館で紀元前2千年紀頃のヘマタイト製の分銅の長さ・質量の計測を行った。調査対象遺物は，イラク南部のウル遺跡から1925年から1932年の調査で出土した分銅が多かった。これらの形状は，円筒型が21点，台形が4点，三角柱・四角柱・卵形がそれぞれ1点，動物型は，2点でスカラベ型とアヒル型の分銅であった。このうち，円筒型21点の長さについて分析したところ，横幅の長さが，2.9cm以下のものと3cm以上のものに大きく二つに分類できた。

次に，分銅を最新技術を駆使して計測するために，フォトグラメトリ用の写真撮影を実施した。撮影後は，

3DFゼファーを用いて点群データを作成し，3Dモデルを作成した。特に苦心したのが，ヘマタイト製の分銅の中でも特に光沢が強いものを撮影することである。遺物そのものの光沢が強いと，室内ライトや自然光に反射し，3Dモデル化に必要な点群データが取れなくなるからである。それらを解消するためには，撮影後にある程度フォトショップなどを用いて修正をする必要が生じた。

今後の課題として残されたのは，光沢のある遺物の撮影方法を再検討することである。そして，最終的には作成した3Dモデルから分銅の長さや体積を算出し数値化することで，今まで曖昧になっていた分銅の「基準」について考察していく予定である。

7.　サウジアラビア北西部アラカーンにおける古代北アラビア文字・ナバテア＝アラビア文字併記碑文の発見

徳永　里砂・アブドゥルイラーフ　アルファーリス・アブドゥルムフセン　アルムニーフ

2023年6月，サウジ文化遺産庁・金沢大学合同考古学プロジェクト（日本側代表：藤井純夫教授）の一環として，サウジアラビア北西部，ヨルダン国境付近のアラカーン村（タブーク州）にて碑文調査を実施した。その際，地域の協力者により撮影された写真中に，古代北アラビア文字・ナバテア＝アラビア文字併記碑文が刻まれた石を発見した。石は村の墓地内にあり，調査期間中の実見は叶わなかったが，その重要性に鑑み，サウジ文化遺産庁が7月に同地を再訪し，調査を行った。

この石は幅54cmの砂岩で，碑文が刻まれているのは一面のみである。碑文は横書き（右→左）で，1，2行目が古代北アラビア文字の一派であるサムード文字D，3行目がナバテア＝アラビア文字にて刻され，文面はいずれも「私はフサイルの息子ハルブー」と解釈される。まず，サムード文字D碑文から見てみると，この種の碑文が通常縦書きであるにもかかわらず横書きになっているのは，縦書きできないナバテア＝アラビア文字碑文の併記を想定して，これに合わせたものと考えられる。文字はアラカーンの岩壁に見られる同種の縦書きの碑文と同様，いくつかの文字に変則的特徴が見られる。刻者の人名ハルブーはおそらくアラビア語名の「ハルブ」で，語尾に文字*w*が付加されているのは，ナバテア語の綴りの影響と見られる。一方，ナバテア＝アラビア文字碑文は，サムード文字D碑文よりも小さく刻まれている。ナバテア＝アラビア文字碑文は，ナバテア文字からアラビア文字の過渡期の文字を指すが，本碑文の文字は非常に発達した5世紀のもので，「パレオ・アラビック」と呼んで差し支えない。ナバテア語の綴りが採用されているが，形骸化されたものと考えられる。書体・文体ともにエイラートの西北西8キロのシナイ半島で発見された5世紀末のジャフナ（ガッサーン）朝の王サァラバの碑文と類似し，2碑文はほぼ同時代に位置付けられよう。

本資料の最大の歴史的意義は，これまで4世紀末までには使用されなくなったと考えられてきた古代北アラビア文字の年代が，1世紀後まで引き延ばされることである。また，この発見により，アラビア半島における前1千年紀前半から続くアラブの刻文の伝統が，イスラーム時代最初期まで途切れなく結びつけられる可能性が高まった。

8.　バハレーン，ティロス期マカバ古墳群の被葬者像

西藤　清秀・板橋　　悠・岡崎　健治・大藪　由美子・鈴木　朋美・岩越　陽平・吉村　和昭

ペルシャ湾の西岸，アラビア半島東方に隣接するバハレーンのティロス期（300BCE–600CE）に築造されたマカバ古墳群の調査を行ない，被葬者のシリア・パルミラを含む地中海東部域との関連について言及する。ティロス期，パルミラのアゴラ出土131CEの年号の碑文にはパルミラ人ヤルハイがバハレーンの「大守」の任についていたことが記されていることから，バハレーンはパルミラ隊商のインド海上交易の重要な中継地として想定でき，当時のバハレーンでのパルミラ人の役割は大きかったと考えられる。

バハレーン本島の北海岸近くには，10箇所余りのティロス期の古墳群が存在し，マカバ古墳群もその一つである。マカバ古墳群は7つの大きな墳丘からなり，古墳群の中央に位置する1号墳の発掘調査を2017年から取り

組んでいる。1号墳は直径約60メートル，高さ2.5メートルの円墳であるが，実際は直径数メートルの小円墳が100基以上，重なり大きな墳丘を形成している。埋葬施設は，小竪穴石室の内外に漆喰を塗布した漆喰室である。現在まで20基の墓を発掘した。

調査の結果，埋葬施設や副葬品から特徴的な葬送を見ることができた。1号墳の埋葬施設には棺内に副葬品を供えるための小さな空間の設置（F-0017），パルミラの水盤に似ている施設の存在（F-0056），棺蓋石上や周辺への施釉陶器碗の供献（F-0056, 62, 63, 77），遺体の口の中への銭貨の納入（F-0033, 48, 63）や革製の小銭（12枚の硬貨：銀貨7枚，銅貨5枚）入れの携帯（F-0063），子供に対しての厚葬（F-0048, 60）や武器武具の未副葬などに特色が認められた。ティロス期の葬送習慣を理解する上で重要な様相である。

放射性炭素年代測定の結果，1号墳の築造年代は紀元前2世紀中頃から紀元後2世紀であり，施釉陶器の年代とも整合する。

マカバ古墳1号墳から出土した歯のエナメル質の炭素･酸素同位体分析の結果, 1号墳に埋葬された人々（F-0033, 56, 63）は他の地域，特にシリア南部からトルコ北東部にかけての地域から移住してきた可能性が考えられる。

今後, マカバ古墳群の発掘調査をさらに進め, 少なくともパルミラを含む地中海東部の人々の存在を確認したい。

第3部会

1.　インド仏教の中心的存在であった飛鳥の川原寺は何故移転しなかったか　　下山　繁昭

飛鳥の四大寺院と言われた川原寺は当時我が国のインド仏教の中心的存在であった。ガンダーラ文化の影響を受けた大量の三尊塼仏が出土した寺院である。平城遷都の頃日本の仏教は国粋化をたどり，川原寺が異質であるが故，人々の信を失い法隆寺より格下，四天王寺と同格となり飛鳥に留まった。移転を拒む何らかの事情があった。新都に受け入れられない事情とは仏教と伴に入った麻の加工による薬，大麻の副作用患者が増えたからではないのか。日本書紀『元年春正月壬申朔甲戌，皇祖母尊，卽天皇位於飛鳥板蓋宮。夏五月庚午朔，空中有乘龍者，貌似唐人着青油笠而自葛城嶺馳隱膽駒山』

訳：即位1年春1月3日。皇祖母尊（天皇の母，皇極上皇）が飛鳥板蓋宮で天皇に即位した。夏5月1日。空に竜に乗る者がいた。その風貌は唐人に似ていた。青い油（アブラギヌ）の笠を着て，葛城嶺から移動して胆駒山（イコマヤマ）に隠れた。人々が集団で騒いだので記録したのではないか，幻覚現象の発現である。即位7年8月の記録，この時の日本書紀に奇妙な記録がある。『秋七月甲午朔丁巳，天皇崩于朝倉宮。八月甲子朔，皇太子奉徙天皇喪，還至磐瀬宮。是夕於朝倉山上有鬼，着大笠臨視喪儀，衆皆嗟怪』

訳：秋7月24日。天皇は朝倉宮で崩御した。8月1日，皇太子は天皇の喪を行い，磐瀬宮に帰られた。この夕に朝倉山の上に鬼が居り，大笠を着て，喪の儀式を覗き見していた。回りの人々は皆，奇怪に思った。この記録では，笠を着ている高貴の身分の化身が現れた。取り巻きに幻覚現象を受けた集団がいた事実を記録したのではないのか。

この現象を起こす原因は何であろうか？延喜式の調（租税）に関する記録では上質の麻の産地は大和，近江，越後，下野，上総であった。奈良県の奈良晒（ならざらし）は有名である。麻からは大麻が摂れる。大麻は「テトラヒドロカンナビノール」とよばれる化学物質により，幻覚や妄想が現れる。

結論，川原寺が移転出来ない理由は薬の副作用の患者が多数発生し，当時の政権は寺ごと断固拒否した。麻薬性を排除した。日本に合う文化を選択した。しかし大麻の薬効は修験者を通じて甲賀忍者に伝えられた。痛み止めに利用された。甲賀は薬草産地であった。江戸時代忍術伝書『萬川集海』の21巻に阿保薬として伝わった。其の元になったのは忍術書『軍法間林清陽巻中』であり，その写本が最近発見された。

2.　古代クシュ王国における戦争と女性　　田中　延和

前10世紀頃，ヌビアの地にクシュ王国が成立する。具体的な成立過程は不明であるが，その後4世紀頃まで存

続する強大な政体であった。

これまでのクシュ王国の研究は，主に王および王家を中心としたものであった。これは，依拠する史資料が王の碑文や王家の墓が中心という史料的制約に起因する。また，男性中心の研究であり，女性が登場しても，王家女性が中心であった。このような状況から，王家以外の女性の研究の不在，さらにジェンダー研究の不在が，クシュ王国研究の課題として指摘されるようになってきた。

本報告ではこの研究史上の欠落を埋めるため，王の碑文に現れるクシュ王国における女性の状況ついて分析した。史料としたのは，前4世紀の王であったハルシヨテフとナスタセンの碑文である。二人の碑文には，他の王の碑文と異なり，多くの戦争の記録と戦利品および捕虜のリストが含まれており，王家以外の女性が捕虜の中心として記載されているからである。

二人の王の碑文には，他の王より多い戦争の記録がある。簡潔な戦争についての記述の後に，戦利品や捕虜のリストが続く。このリストには，牛や家畜，金，捕虜となった地域支配者などが記されている。注目すべきはおびただしい数の牛と多くの女性の捕虜の存在である。特に，ナスタセンの碑文では，男性捕虜の記載が消える一方で，「すべての女性」などという記述さえ見られるように，捕虜の中心は女性となる。

捕虜となった女性は，王の碑文から神殿や宮廷に分配されたことがわかる。確認できる範囲では，捕虜女性の神殿への分配は，タハルコの時代までさかのぼれる。さらに，兵にも分配されたようである。捕虜の女性は工房や農園，神官や宗教儀礼の音楽関係など多様な仕事に就いたと推定できる。

牛が強調されることは，遊牧が重要であるヌビア社会の特質を示す。では，なぜ女性が強調されたのか。古代エジプトの史料から明らかなように，当然男性の捕虜もいたはずである。また，女性の捕虜を強調する傾向が，ナスタセン期に加速するのはなぜか。このことは，もともとエジプトの王権イデオロギーをベースにしていたクシュの王が，ヌビア社会の王としての独自性を示すようになったということであり，エジプトと比較して，ヌビア社会では女性が重要かつ有用な存在であったことを示している。

3.　メロエ遺跡出土「用途不明品」の重要性：金属製品を中心として　　関広　尚世

本発表では，メロエ遺跡で小型製品やMiscellaneousと分類された遺物に着目した。これは，日本の発掘調査で「用途不明品」として報告されている分類に相当する。報告者は，第61回大会で「持続可能な開発目標に基づくスーダン国立博物館所蔵資料の研究」と題しポスターを行うなど製鉄・鉄器研究に焦点を当ててきた。用途不明品に着目するのもその延長であるが，今回は管理警告（アドミン・アラート）もその理由の一つである。

スーダンでは4月15日に軍事衝突が発生，同国内での調査研究が難しい環境となった。また，当局から発せられた管理警告により，遺跡保全のために収蔵資料を含む博物館や遺跡の詳細な情報を公開共有することを自粛する必要性もあった。このため，現状では研究者しかアクセスし得ないがスーダン研究の進展に寄与することもできる対象として，いわゆる「用途不明品」のうち，特に金属製品に着目することとした。

P. L. シンニーとR. J. ブラッドレーは，‘The Capital of Kush 1. Meroe Excavations 1965–1972’ において，この「用途不明品」をそれ自体は印象的なものではなく，些細なもので，時期は明瞭に特定できないとしながら，メロエにおける日常生活がわかる現存資料の一部という取り扱いをしている。

同報告における用途不明品のうち金属製品は11%（403点）を占め，そのうち鉄器が51%（204点）であった。さらに鉄器のうち種類が判別可能であった資料は33%（68点），判別可能だが破片資料は27%（54点）であり，残りが種類不明な破片と他の金属と共伴する資料であった。種類判別が可能な資料は，M. バシールの分類を参照するとIV類に属する釘が最も多く，鉄鏃，指輪，コホル棒などが含まれたが，斧と刃物は分類候補が複数項に及び，鈎には釣針が含まれることから農耕具以外に漁猟具の分類項を新設する必要性が認められた。このように，用途不明品は鉄器の様式把握を深化させる可能性も秘めている。

さらに，サナム遺跡やムエイス遺跡の調査報告ではインゴットや鉄製未製品に関する記載があり，製鉄や鉄器

生産に必要な原料の調達・流通を検討する必要性を示している。それに貢献すると考えられるのが，用途不明品に分類された鉄器のうち種類不明の破片と他の金属と共伴する資料に含まれ，鉄器製作の素材とされた資料である。このように，用途不明品は製鉄と鉄器生産モデル構築の一端をささやかに担う可能性もある。

4.　ローマ時代ユダヤ地方におけるユダヤ人の離散状況：
ラマッラー～ナブルス間（パレスチナ自治区）の考古学的調査から　　長尾　琢磨

初期ローマ時代ユダヤ地方におけるエルサレムは，ユダヤ教の第二神殿を有する政治的･宗教的な中心地であった。しかし，ローマ帝国とユダヤ人の対立は進んでいき，66年には第一次ユダヤ戦争が起こり，70年にはエルサレムが陥落し第二神殿が破壊された。その後，132年に第二次ユダヤ戦争が起こり鎮圧されると，ユダヤ人はエルサレムとその周辺に立ち入ることが禁止された。結果として，ユダヤ人は離散の民となり，ユダヤ教の中心地はガリラヤ地方に移っていくこととなった。

シナゴーグ（ユダヤ教の礼拝所，集会所）の分布をみると，実際にユダヤ地方には神殿崩壊以降のシナゴーグは一例も確認されておらず，ローマ時代以降のシナゴーグはガリラヤ地方に集中している。一方で，当時のユダヤ･サマリア地方の大部分は，考古学的調査が十分になされていないパレスチナ自治区に位置しており，シナゴーグが現在確認されていないというだけで神殿崩壊以降のユダヤ人共同体の存在を完全に否定することは難しい。加えて，近年のパレスチナ自治区の踏査によって，現在のラマッラー～ナブルス間において，神殿崩壊以降のものと考えられるユダヤ人の墓が見つかっており，周辺地域に離散したとされるユダヤ人の他に，ユダヤ地方に残留した人々がいたことも否定できない。

このような状況を受けて，2023年にパレスチナ自治区における墓地の考古学的調査（第3次調査）を行った。本発表では，ラマッラー～ナブルス間（パレスチナ自治区）で行った墓地に関する考古学的調査の成果を述べ，ローマ時代ユダヤ地方におけるユダヤ人の離散状況について検討した。

ラマッラー～ナブルス間の大規模な墓地では，例えばアルコソリアやローリングストーン式の入口など1世紀～2世紀に典型的な特徴が多数確認され，とりわけ墓のファサードは陥落前のエルサレムの墓を模倣したものであった。一方で，内部が曲がって造られているなど，エルサレムの墓と比較して墓の質は低下していた。以上の点から，これらの墓地は神殿崩壊以降のエルサレム周辺からの墓職人を含む移住者の墓地であり，ユダヤ地方の山間部には，エルサレム陥落後に，一定規模のユダヤ人のコミュニティが作られていたと考えられる。

5.　歴史学と歴史教育の対話から考える「開かれた古代地中海世界史研究」　　佐藤　育子・丸小野　壮太

本発表は，現在共同研究を進める歴史学と歴史教育の対話に基づいた「開かれた古代地中海世界史研究」の意義とその位置づけを明らかにすることを目的とした共同発表である。

まず佐藤が，本発表は研究の場と教育の場における双方向の不可分の協働作業であることを明言した。次に，本発表の主題である「開かれた古代地中海世界史研究」の二つの重要な意味と目的について具体例を引きつつ明らかにした。一つ目は本研究が人々の移動とネットワークの観点からグローバル・ヒストリーとしての意義を持ち，古代移民の先駆けとなったフェニキア人の事例に着目することで，フェニキア・カルタゴ史の視点から「古代地中海世界史研究」の枠組みを問い直すことである。二つ目は近年の歴史学の潮流が明らかにしているように，世界史に関連する国内外の議論を，専門家のみならず生徒や学生を含む一般市民に「開かれた」歴史実践という観点から考察することであり，これによって高大連携や市民協働型の歴史実践による「古代地中海世界史研究」を構築することが可能となる。

さらに丸小野が，昨年度から大きな改革が行われている高校歴史教育の現状と課題について，古代史の危機的状況を踏まえた上で，高校における「開かれた古代地中海世界史研究」の位置づけについて考察し吟味した。その中で，先行研究を分析し紹介するとともに，先行研究の空白部分である本共同研究の新規性についても提言し

明白にした。そして我々がこれまで取り組んできた①ワークショップ・フェニキア文字実践，②高校「歴史総合」や大学「西洋史学論」における近現代史と古代史を越境する授業実践等について，その実践例を具体的に紹介した。それにより，現代文明における様々な事象の基層は古代地中海世界に遡ることができることを明らかにし，古代人と現代人は時代を越境しているが同じ人間であり，例えば多文化共生など，現代人の私たちが古代人から学ぶことが多いことも付言した。

最後に二人で，現代的諸課題とも深く関係する人々の移動とネットワークに注目することで，「開かれた古代地中海世界史研究」の重要性と，歴史学と歴史教育の対話に基づく歴史実践の意義について改めて問題提起した。以上をまとめると，高校歴史教育と大学歴史教育の垣根を越えたさらなる両者協働型の歴史実践の構築を新たな課題とし，それには他分野との新たな共同研究の可能性を今後の展望として締めくくった。

6.　自他動詞の派生関係をめぐるペルシア語の特異性　　五十嵐　小優粒

動詞の自他対応について，Nichols et al.（2004）では「非他動化（detransitivization）」「他動化（transitivization）」「不確定（indeterminate）」「中立的（neutral）」の4つの分類が提言されている。これらを用いて自他動詞の対の有標性について考察しているナロック（2007, 297–298）に「非他動化を好む言語は，他動詞を動詞語彙の基盤とし，他動化を好む言語は，自動詞を動詞語彙の基盤とする」とある。確かにペルシア語では，自他同形の動詞を除いてすべて自動詞の方が無標である。だが，有対動詞と無対動詞の割合から自動詞を欠いている他動詞が非常に多い。動詞の数の上でも他動詞が勝っている。ペルシア語は「他動化」型と言えるが，ナロック（2007）の見解に完全には当てはまらない。本発表では，他動化型でありながら他動詞をより好んで選択するというペルシア語の特異な性質に言及する。

具体的な数に言及すると，黒柳（1996a）に掲載されているペルシア語の本動詞は436個である。そのうち，他動詞が284個，自動詞が190個で，自他同形の動詞が38個であった。この他動詞と自動詞の数に，自他同形の動詞の数も含まれている。さらに，他動詞284個のうち，対応する自動詞を持たない無対動詞が188個で，対応する自動詞を持つ有対動詞が96個である。また，自動詞190個のうち無対動詞は100個で，有対動詞は90個ある。自他動詞とも，この有対他動詞の中に自他同形の動詞の数（38個）も含まれている。

ペルシア語は自動詞を動詞語彙の基盤としていながら，動詞の数では他動詞のほうが多い。それも無対動詞が多く，自動詞からの派生ではなく単独で生成されている。真に他動詞の頻度が高いか否かはコーパスなどで精査する必要があるが，本発表では文献で確認できる動詞の数からペルシア語の1つの特徴を考察した。

参照文献

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版.
角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）（2007）『他動性の通言語的研究』くろしお出版.
パルデシ　プラシャント・桐生和幸・ナロック　ハイコ（編）（2015）『有対動詞の通言語的研究―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版.

7.　クルアーンにおける疑問文の機能　　榮谷　温子

本発表では，クルアーン第1–20章の計2,483節（全6,236節中39.8%）から抽出した計386の疑問文を分析し，それらの形式や機能を明らかにすることを試みた。まず，関係性理論やそれに関する先行研究を参照し，疑問文の種類（情報要請疑問文，思索疑問文，試験疑問文，修辞疑問文など）を確認した。全知全能のアッラーが被造物に対して情報要請することはあり得ず，また思索（自問自答）するとも考えにくいので，クルアーンでは，疑問文の多くが修辞疑問文となる。

まずYes-No疑問文のうち，halを用いた疑問文36例は，先行研究の指摘通り，修辞疑問文が多いが，5章91節

では肯定の強調，実質的には命令の意味で用いられていた。呆れや嫌悪を表す用法も見られた（6章158節，7章53節）。ʾa-を用いた疑問文は，肯定疑問文が116例，否定疑問文が117例で，いずれも非難と反語の用例が多かったが，肯定疑問文では「見たか？」という疑問文が「見ろ，考えろ」という命令的な意味になっている例（11章88節，18章63節）なども見られた。

Wh-疑問文では，質問者と解答者の意図のずれ（質問者は非難を意図しているのに，解答者が情報要請されたと考えて答える等）がいくつか見られた（7章12節，20章83節など）。断定の前触れとしての解説疑問文の用法もあった（6章12節，13章16節）。挑発や命令を意図した例（7章203節）も見られた。また情報要請とともに驚きをあらわす例（19章8節，19章10節）などもあった。

その他，ʾam（節の最初に来たもの）およびʾimmāが疑問を示すのに用いられている（ʾamが11例，ʾimmāが2例）。ʾamの例は，いずれもアッラーか預言者ムハンマドの台詞で，非難や反語とともに，肯定の強調に用いられるなどする。なお，13章33節のʾamは，節の中途に出現しているが，その直前にjīmの記号すなわち休止許可の記号が付されているため，節の最初の位置に準ずるものとして扱った。ʾimmā…wa-ʾimmāは，いずれも妖術師たちの台詞で，情報要請に用いられている。

今回の調査では，先行研究ではあまり指摘されていない，疑問文の命令的用法の例を複数指摘することができた。他方，先行研究でも述べられているとおり，疑問文の種類は明確に分類できるとは限らず，文脈的に機能がこれと断定できない例もあった。

第4部会

1.　アーザル・カイヴァーン学派の源流：
デリー・スルターン朝時代の古代イラン語とウズワーリシュン　　**青木　健**

本発表は，16世紀後半のイラン及び17世紀前半のインドで活動した「ゾロアスター教神秘主義学派」アーザル・カイヴァーン学派の源流の探求を目的とする。ゾロアスター教を母体とする彼らの同時代的規模は大きなものではない。寧ろ，彼らの源流や影響を中世イラン・インド思想史上の文脈に載せた方が，生産的な議論を展開できるだろう。本発表では，彼らの思想的特徴のうち，古代イラン語の創出に絞って，その源流を探りたい。これまでの研究では，彼らが使用した人造古代イラン語語彙は，16世紀後半のサファヴィー朝イランまたは17世紀前半のムガル帝国インドで，アーザル・カイヴァーン（1618年没）が創出したと考えられてきた。しかし，サーデギーが2020年に発表した論文によって，1519年にビハールで編纂されたペルシア語辞書に，人造古代イラン語語彙が大量に含まれていたと指摘された。だとすると，ローディー朝末期の北インドで，かなり大規模な古代イラン文化受容と語彙偽造が起こったことになる。だが，一部の人造古代イラン語は，サイイド朝初期のペルシア語辞書にまで遡ることが確認された。また，ゾロアスター教パフラヴィー語のウズワーリシュンの正確な知識がペルシア語辞書に反映されるのは，200年後のムガル帝国時代であることも確認された。中世インドに於ける古代イラン文化受容と偽造は，かなりのタイムスパンを伴った継続的な文化現象である。

2.　サファヴィー帝国エスマーイール2世期の政治展開：
16世紀後半「第二次内乱期」の実相解明の一端として　　**宍戸　遥弥**

サファヴィー帝国（1501–1736）の基礎を築いた2人の君主，すなわち2代目君主タフマースプ1世（在位1524–76）と5代目君主アッバース1世（在位1587–1629）の治世に挟まれた1576年から87年までの時期は「第2次内乱期」と呼ばれ，外敵の侵入とトルコ系遊牧軍人の反乱による混乱の時代とされてきた。一方，この10余年にはタフマースプによる中央集権化の手法や成果がアッバースに継承されてゆく過渡期としての側面もある。本報告ではこの期間のうち3代目君主エスマーイール2世（在位1576–77）の治世を取り上げた。彼は王子時代に父タフマースプにより辺境に幽閉されていたが，同君主崩御後に臣下の招聘で即位し，1年余りで崩御した人

物である。報告では，この間の政治情勢の展開が帝国の歴史にどのように位置づけられるかを検討した。まず，1576年2月のタフマースプ崩御から，同年8月のエスマーイール2世即位を経て，77年11月の同君主崩御に至るまでの期間を3つに分け，政治情勢の展開を論じた。具体的には首都ガズヴィーンにてタフマースプ崩御を受けた後継者争いが生じてからエスマーイール2世の招聘が決定されるまでの時期，エスマーイールの首都行軍から即位式の直後までの同君主による支持基盤確立の時期，王族の粛清や辺境地帯での抗争を通じて政権が変質していった治世後半の時期，の3つである。次に，3つの時期の間でどのような変化や継続が確認できるのかを論じた。トルコ系遊牧諸部族の勢力図の変化，宮廷情勢と地方情勢の連動の強化，中央宮廷における王族の影響力後退，君主の個人的知遇を得た近臣層の台頭といった傾向を取り上げ，エスマーイールがタフマースプの中央集権化の功罪を巧みに利用してその権力を確立しつつ，王族ではなく近臣を通じて集権化を図るという新たなモデルを確立したことを示した。最後に，以上の変化は宮廷，地方情勢の不安定化を引き起こし，直後の時代における混乱を引き起こした一方で，アッバース1世による中央集権化を先取りするものとなったのではないかとの仮説を提示した。今回は16世紀成立の叙述史料を中心に検討を行ったが，今後は後代の史料や文書，先行研究を踏まえて分析を精緻化してゆく。

3.　18世紀イスタンブルのシャリーア法廷と法廷業務の集権化　　守田　まどか

4.　ガージャール朝ペルシア語普遍史書研究序説　　大塚　修

本報告では，ガージャール朝（1796–1925）時代のイランにおいて編纂されたペルシア語普遍史書（神による天地創造に始まる一神教的世界認識に裏打ちされた人類の歴史を，著者の時代に至るまで説き明かした歴史書）諸作品の全体像を示した上で，その特徴や傾向についての考察を行った。

ガージャール朝時代の歴史叙述についての既存の研究の関心は，王家の血統や正統性といった政治史上の重要な主題に加えて，西欧の歴史叙述や教育の影響を受ける過程での国民国家イランの歴史の創造といったナショナリズムに関係する主題に向けられることが多かった。そのような研究の中で，幾つかのペルシア語普遍史書が分析対象とされることもあったが，それは，『ナーセルの清浄園』（1853–57年），『歴史の廃棄』（1856–89年），『ナーセルの整えられた歴史』（1881–83年）など石版本として出版された作品が中心であった。しかし，これらは必ずしもガージャール朝時代のペルシア語普遍史書の代表作とは言えない。じつは，これらの普遍史書が石版本として出版された時代には，未だに多くの普遍史書が手稿本の形で編纂され続けていた。報告者が世界各地の図書館に収蔵される手稿本の悉皆調査を行った結果，ガージャール朝時代に編纂されたペルシア語普遍史書は，少なくとも23点にのぼることが確認されている。つまり，宗教的な世界認識に基づく伝統的な普遍史書は，西欧の歴史叙述が輸入され，書物の形が手稿本から石版本へと変化していく転換期においても根強く編纂され続けていたのである。

ガージャール朝時代には，第2代君主ファトフアリー・シャー（在位1797–1834年）の治世以降，宮廷の主導で数多くの普遍史書が編纂され，その中には，ムハンマド・リダー・タブリーズィー著『歴史の飾り』（1806/7年）という大部な普遍史書も確認できる。この作品については30をこえる手稿本が現存しており，西欧の東洋学者によるイラン史叙述にも大きな影響を与えた。また特筆すべきこととして，宮廷図書館では，過去に編纂されたペルシア語普遍史書の「名作」が数多く書き写されている。普遍史書の編纂は，第5代君主モザッファロッディーン・シャー（在位1896–1907年）の治世に至るまで確認でき，ガージャール朝時代の歴史叙述について考察する際には，これらの作品に関する検討も進めていく必要がある。

5.　ミシェル・サッバーグによる3つの『千夜一夜』写本とその編纂過程　　中道　静香

シリア出身のキリスト教徒ミシェル・サッバーグ（Michel Sabbagh, 1775–1816）は，19世紀初頭にフランス

の東洋学界の下で活動し，パリに集う著名な東洋学者らの仕事を支えてきた知識人である。ナポレオンのエジプト遠征時，カイロにいた彼はフランス人指揮官に仕え，その後1801年の仏軍退却に乗じて渡仏した。パリでは，王立（帝立）図書館などでアラビア語写本の筆写・製作に従事し，『千夜一夜』の写本も手掛けたことが知られている。しかし，彼の手による代表的な『千夜一夜』写本，フランス国立図書館所蔵のBnF arabe 4678–79（パリ写本）は，架空の奥書が付されていること，アラビア語原典のない挿話を含んでいることから，1994年にムフスィン・マフディによって「偽写本」と判断された。以降，『千夜一夜』写本の系譜において，複数あるサッバーグの写本が正統なもの，価値あるものとして扱われることはほぼない。

一方発表者は，サッバーグの諸写本が，『千夜一夜』の編纂過程を解き明かす糸口になりうると考え，調査と分析を行ってきた。編纂に関わる状況証拠が乏しい写本が多い中，サッバーグの経歴・交友関係・業績に関する資料は複数残っている。一人の人物が写本を編むその営為を，編纂時の状況と結果としての写本をつき合わせて検証できる，貴重な事例といえよう。発表では，彼の3つの手稿本，上述のパリ写本，ロシア国立図書館所蔵のNLR ANS 355（サンクトペテルブルク写本），バイエルン州立図書館所蔵のBSB Cod.arab.629（ミュンヘン写本）のうち，特にミュンヘン写本に焦点を当てて報告を行った。低品質の紙の小冊子に，余白はとらず，極小の文字で綴られ，取消し線や省略も多い。このような体裁のミュンヘン写本は，サッバーグが新たな編纂本を作るため，自分用の草稿として最初に作ったものだろう。さらに，様々な写本との校合の結果，当該写本はサッバーグがパリの図書館で閲覧できた複数の『千夜一夜』写本（BnF arabe 3613–14, 3616, 1617等シャヴィ関連写本，その他）を複写しつつ加筆・修正したもので，彼はこれを下敷きに，完成品としての2種類の1001夜完結写本，すなわちパリ写本とサンクトペテルブルク写本を編纂したと考えられる。

6.　近代クルド学の父オルベリとソヴェト・ロシア　　村上　武則

本発表ではまずロシア・ソ連圏の近代クルド学がアルメニア学を触媒として発展してきたこと，およびソ連のコーカサス少数民族研究としての性格を持つことについて述べた上で，アルメニア人オルベリとその弟子たちの事績を概観した。最初にクルド学史のメルクマールとなる研究としてガルゾーニ神父の文法と語彙集に始まり，オスカル・マンやハチャトゥル・アボヴィアンの探検を経てアウグスト・ジャバのクルド語辞典完成に至るに際し帝政ロシアのサンクトペテルブルクに欧州のクルド学知が集積するようになっていたことを述べた。オルベリはそのような状況下でサンクトペテルブルク大学においてクルド語を初めて講じたのであるが，オルベリ自身は元々クルド語の話者ではなく，1911–12年に行われた現トルコ領のバフチェサライ（モクス）での野外調査によって現地のクルド人社会の中で生活しながらクルド語を習得している。その際の調査記録と成果物であるクルド語クルマンジー方言モクス変種辞典は2002年になって初めてクルド語－ロシア語部分のみが元のオルベリ自身のノートの変形アルメニア文字による手稿をキリル文字に直した形でアルメニア国内で刊行され，残りのアルメニア語－クルド語辞典部分（ロシア語－クルド語ではない）は2023年現在でも未刊のようである。このオルベリの辞典の記述スタイルは自身の指導下にあったチェルケス・バカーエフのクルド語－ロシア語辞典（1957）に色濃く反映されており，この辞典がオルベリとバカーエフの合作と呼ぶにふさわしいこと，対象としているコーカサス・広域アルメニア変種のクルド語語彙の音声的・意味的個別記述を目指しているという点において後代にソ連で出版されたクルド語の辞典類が規範性や標準変種の確立を意識しているのとは異なっていることを指摘した。オルベリ門下のソ連の研究者たちはクルド語のみならずイラン学の諸分野に輝かしい事績を残してはいるものの，クルド語で書かれたクルド人自身によるクルド学の歴史に関する記述を見てもオルベリに関する言及はごくわずかである。最後にロシア・ソ連で発展したクルド学とベディルハーン兄弟の亡命に始まる西欧のクルド学の2つの流れが21世紀になって交差し始めている現象について，アルメニア出身のヤズィーディーである研究者がドイツの大学でクルド語を講じている例を紹介した。

7.　現代トルコにおける若者とスピリチュアリティ　　藤本　あずさ

現代社会においては，信仰心の在り方は固定されず，宗教は個人の心の中で自由に形成されている。従来の研究では，ルックマンの「宗教の私事化」やデイヴィの「所属なき信仰」，SBNR（Spiritual But Not Religious）といった概念が提唱され，伝統的な教団や制度に縛られず，個人が自由に信念や宗教的要素を選択して信仰心を形成していることが示されてきた。

そこで本発表では，世俗主義を掲げるトルコにおいても，ヨーロッパやアメリカの動向と並行して個人的／主観的な体験を重視するスピリチュアルな実践が人気を博している現状に注目し，そうした実践の主な担い手である20代，30代の若年層は従来のイスラーム観と新たな価値観をいかに理解しているのかを検討した。彼らはヨガや瞑想の他にも書籍で運勢を占ったり（スピリチュアリティ関連の書籍は20代後半から30代前半の女性が主な購買層），パワーストーンやチャクラブレスレットを着用したりと，日常生活にスピリチュアルな実践を気軽に取入れていた。他方，宗教団体や政府は若者のイスラーム離れや理神論および無神論への傾倒に懸念を示すとともに，他宗教実践も行うスピリチュアルな実践のビジネス的性格を強調するなどして批判的な態度を取り，時に圧力をかけている。

このように昨今のトルコの若者たちはイスラームと距離を置き，聞き取り調査ではスピリチュアリティの実践をセキュラーで今時なものであると答え，手軽に心を癒しているように見えた。しかし，前世療法やシータヒーリングなどイスラーム的概念から逸脱する思想が混在する場合，疑問視や危険視する声が一部ではうかがえた。

また，類似する事例の一つとして漫画の人気傾向について着目した。トルコでは日本の漫画が若者に人気がある。特に主人公が心身を鍛え，友人や師と苦難を乗り越える展開が支持されている。修行という概念はスーフィズム（イスラーム神秘主義思想）においても重要で馴染み深いものである。一方で，異世界転生や生まれ変わり，そして同性愛を扱う内容は高い人気を獲得しにくい傾向があった。このように，スピリチュアリティの実践と同じく，漫画のような娯楽においても社会通念であるイスラーム観とそぐわない要素が含まれると受容されにくい傾向があるといえ，彼らは伝統的なイスラーム観との調和を保ちつつも，意図せず一定のボーダーラインを規定している可能性を指摘した。

第5部会

1.　企画セッション：ポスト・イブン＝スィーナー期の哲学，神学，医学

1-1. ポスト・イブン＝スィーナー研究とその意義　　小林　春夫

イスラーム哲学史の分野ではここ20年余り「ポスト古典期」または「ポスト・アヴィセンナ期」（本発表ではポスト・イブン＝スィーナー期とする）をキーワードとした研究が盛んである。おおまかに6/12世紀を画期とする後期イスラーム哲学の発掘と再評価の試みである。従来，この時期はイスラーム社会の混乱に乗じて宗教勢力が台頭し，合理的（科学的・哲学的）学問が衰退し，知的創造性が損なわれた時期とされ，実証的な研究が放擲されてきた。しかし20年以上前にD. Gutas（2002）は，西暦1000年から1350年の時期が「アラビア哲学の黄金期」と呼ばれることになるだろうと述べたが，この時期の研究は彼の予測を超えるスピードと広がりをもって進展し，今日では個別研究の族生とともに，地域や宗派を越え，諸学問の位階に囚われないダイナミックな知的交流の姿が明らかになりつつある（Griffel 2021など）。本発表では，最近の研究に依りつつポスト・イブン＝スィーナー期の展開と特徴を概観し，またこの時期の「哲学」を巡る言説を比較検討することによって，イスラーム知性史における「哲学」の意義について考察した。

第一に，イスラーム世界における「哲学」はギリシア哲学（ファルサファ）の摂取に端を発するが，それはポスト・イブン＝スィーナー期においてガザーリー（505/1111年没）やファフルディーン・ラーズィー（606/1210年没）らの批判的吟味により変貌し，イスラーム的学知（マドラサ教育に代表されるイスラーム的スコラ学）に同化された。第二に，ポスト・イブン＝スィーナー期における「哲学」はファルサファ（アリストテレス的哲学

体系）と同義ではなく，上述の変貌を遂げた「イスラーム哲学（ヒクマ）」である。この視点をとることによってはじめて，ポスト・イブン＝スィーナー期における「哲学」の特徴が明らかになり，カラームやフィクフやスーフィズムを含めたイスラーム知性史（エピステーメー）の構造把握が可能となるであろう。

F. Griffel, *The Formation of Post-Classical Philosophy in Islam*, Oxford University Press, 2021.
D. Gutas, “The Heritage of Avicenna: The Golden Age of Arabic Philosophy, 1000–ca. 1350,” in J. Janssens and De Smet (eds.), *Avicenna and his Heritage*, Leuven: Leuven University Press, 2002, 81–97.

1-2. ガザーリーと哲学　　加藤　瑞絵

本発表ではガザーリーAbū Ḥāmid al-Ghazālī（1058–1111）を1つの事例として，ポスト・イブン＝スィーナー期の哲学（ファルサファ）と神学（カラーム），そしてスーフィズム（タサウウフ）の関わりを検討した。多くの先行研究において，ガザーリーがアシュアリー派神学者の立場から哲学を批判した一方で，哲学者へ敬意を示し，その学説を（特にイブン＝スィーナーから）受容しており，彼は単なる哲学批判者ではないという見解が示されてきた。但し，その受容がどの程度，どのようなかたちであるか，という点で解釈が分かれる。第1には，哲学を積極的に受容し，接近したことを強調する立場。第2には，あくまで伝統的神学者の立場に留まり，哲学受容は一定の範囲内であったとする立場。第3には，上記2つの立場のように神学と哲学を対立的に捉えず，そこにスーフィズムも加え，ガザーリーが新たな学問体系を構築しようとしたとする立場。近年の諸研究で新たに示されてきたのが，この第3の立場である。これら諸解釈は，彼が哲学を批判的に受容することで何を創出しようと目指したのか，という問いにつながるものであろう。また，哲学受容に関して，彼が論理学を高く評価し積極的に導入したことも，研究者の間で一致した見解である。『哲学者の自己矛盾（*Tahāft al-Falāsifah*）』の中で，ガザーリーは哲学者の不信仰の要因として，彼らの追従（タクリード）を批判する。アシュアリー派神学の伝統において重視されてきた通り，単なる追従とは違う確かな知識が重要なのであり，ガザーリーにとって，その確かさをもたらすものが論理学であった。例えば『宗教諸学の再興（*Iḥyā’ ʿUlūm al-Dīn*）』におけるスーフィー修行論の1つには，確実な知識獲得の方法として哲学の三段論法を導入している。ガザーリーがスーフィズムに果たした役割として，これまではスーフィズムの正統化と大衆化への貢献に注目されてきたが，イルファーンのような神秘思想と哲学との接近への橋渡し的存在としても位置づけうるのである。近年の研究では，イブン＝スィーナー以外の哲学者からの影響や，思想家にとどまらない積極的な活動家としての側面も明らかにされてきた。ガザーリーの思想がイスラーム思想史の展開の中でどのような意義を持ったかを改めて検討することは，異なる学問潮流がいかに影響し，関連し合い，新たな知を構築していったかをより鮮明に描き出すことにつながるはずである。

1-3. イブン＝スィーナー哲学の批判と継承　　宮島　　舜

アラビア語圏の哲学史においてはイブン＝スィーナー哲学体系の登場が最大の劃期の一つとなる。その後の哲学的営為はイブン＝スィーナーの樹立した理説に応答することから自由ではありえなかった――いわばかれの思考を祖述することや批判することや超克することが哲学することの中核を占めることとなった。そしてそのようにしてなされたポスト・イブン＝スィーナー期の哲学のなかで多彩な思想が開花した。これについてはアンリ・コルバンの前駆的仕事により広宣されて久しいものの，哲学研究者の多くの関心は爾後もイブン＝スィーナー以前およびかれ自身に向けられ，精察するに値するものとしてポスト・イブン＝スィーナー期の哲学者たちの独創的思考が顧みられることは相対的に少なかった。それでも近年は欧米を中心に新世代の研究者たちが，同期に展開した，狭義の「哲学（ファルサファ）」の叙述をはなれた豊饒な哲学的思考に光をあてはじめている。本発表ではポスト・イブン＝スィーナー期の哲学を考えるうえでときにもっとも大切な時代と目される6/12世紀に，イスラーム世界に擡

頭した哲学における革新的思潮を，この思潮を代表する哲学者であるアブルバラカート・バグダーディー（d. c. 560/1165）の知識論を中心的に論ずることで示した。

6/12世紀の哲学において大きな知識論の革新が生まれた背景にはイブン＝スィーナー哲学そのものにくわえていまひとつの素因があった――ガザーリーによるイブン＝スィーナー哲学批判である。この批判はしばしばガザーリーがイブン＝スィーナーら哲学者を不信仰として断罪した点が強調されるが，その後の哲学史の理解にとってはむしろかれの批判の理路そのものを精密な仕方で検討することのほうが重要である。たとえばガザーリーが剔抉した哲学上の諸問題のうち，本発表で扱った，神の個物知否定の理論がはらむ困難はただに神学的問題のみならず既存の哲学体系が孕む根幹的な知識論的矛盾をあかすものであった。

アブルバラカートの思考は，既存の哲学が孕む矛盾点を踏まえ，その解消を試みることで，イブン＝スィーナーのものとは別様の独自の知識論として結果した。そこでは知識が関係的に規定されるとともに，反形相主義的な直知的知識論が説かれ，認識構図の転換がもたらされた。

1-4. 薬学書伝統における『医学典範』第二巻の位置づけ　橋爪　烈

本発表は，地中海世界から中近東地域にかけて継承されてきたギリシア由来の薬学の伝統において，イブン・スィーナー著『医学典範』の第二巻，すなわち単純薬の解説を主とする本草学部分の内容・構成がどのような位置づけにあるのかを明らかにする，という大目標に向けて作業中の内容の一端を報告するものであった。

以下，現在行っている作業の報告を順次，提示する。

スレイマニイェ図書館所蔵（管轄図書館含む）の『医学典範』写本57点の諸情報の確認と，全五巻の『医学典範』のどの巻が特に収蔵されているかを分類した。結果は，全巻揃：16，第1巻：17，第2巻：5，第3巻：8，第4巻：7，第5巻：4となった。予想された通り，第1巻の需要が大きく，本草学を扱う第2巻，複合薬を扱う第5巻が少ないことが分かる。また章節の区分や末尾の記述の異同から，『医学典範』に少なくとも2系統の伝承がある可能性を指摘した。

『医学典範』校訂テキスト数種について，どの写本を使用して校訂作業が行われているか，使用写本を指摘するテキストから，実際にそれらの写本を使用しているか確認作業を行った。この作業からも，『医学典範』の写本に異なる系統があることが示唆できた。

スレイマニイェ図書館所属の写本調査から，本草学や農学，食餌などの分野の書物で，薬の材料となる物品を列挙している作品をリスト化し，これを年代順に並べる作業を行った。『医学典範』や本草学書の完成型とされるイブン・バイタール著『薬物集成』の成立後も本草学の書物が執筆され，その伝統が長く続いていることが読み取れる結果となった。

『医学典範』およびその註釈書，また前後の時代の本草学書の収録項目およびその順序，またナツシロギクuqḥwānの項目を取り上げ，各本草学書の記述内容を比較した。医学書としての『医学典範』の重要性は従来から指摘されてきたが，本草学の伝統においては，『薬事集成』ほどの影響力を有さなかったことが，上記リスト化作業およびこの記述内容比較から見えてきた。ただし項目1点での比較であるため，事例を積み上げる必要がある。

現状は，外形的な比較に偏っており，今後は各項目での内容の差異に注目していく必要があることと，『薬物集成』成立以後も，本草学書の執筆がなされていることに注目し，このジャンルの書物にどのような需要があったのかという点についても考察する必要を指摘し，発表を終えた。

1-5. イブン・スィーナー『医学典範』の注釈書研究　矢口　直英

イブン・ナフィース（1288年没）の『医学典範解剖注釈』における「血液の小循環の発見」が20世紀前半に発見されて（Tatawi 1924; Meyerhof 1935）から，イブン・スィーナーの『医学典範』への注釈書は長い間注目

されてこなかった。しかし，ラーズィー（1210年没）が哲学書の注釈書で導入した「真理探究」（taḥqīq）の手法が医学書の注釈書にも採用されたことが明らかになり（Karimullah 2019），『医学典範』注釈書を主題とした研究（Fancy 2020; Eshera 2023ほか）が発表されるなど，『医学典範』注釈書が注目を集めてきている。

イブン・ナフィースを含め，イスラーム世界で解剖が行われたかどうかは論争となってきた。先行研究（Savage-Smith 1995ほか）によれば，解剖を禁ずる法的規定はなく，一部の学者は神を理解する手段として解剖を奨励する。一方で，イブン・ナフィースは「聖法と我々の良心が解剖の実践を妨害する」とも言う。本発表ではこの問題に注目して，医学者たちが諸器官をどのように理解していたか，解剖を行う動機は存在したかを探るために，『医学典範』注釈書における諸器官の記述を考察した。

イブン・スィーナーは『医学典範』第1巻第1部第1教則第2章で「諸器官とそれらの用途（manfaʿa）は解剖と感覚によって会遇（muṣādafa）しなければならない」と述べる。この解剖への唯一の言及に対して，注釈者たちは各々解釈する。諸器官の理解においても用途概念が重視されたことが分かる。

『医学典範』第1巻第1部第5教則における諸器官の総論に対し，注釈者たちは複数の論題に整理して議論を行う。それらの多くは異なる観点からの器官の分類を扱い，うち3つは能力／機能に関係する。それは，①能力の附与・受容による4分類，②統率・被統率・奉仕の関係による8分類を整理した4分類，③（ガレノスの）機能・用途の有無による3分類である。イブン・スィーナーはこれらを別々に語るが，注釈者たちは統一的な解釈を試みている。彼らが厳密な定義を与えるよう腐心した結果，ガレノスが設けていない〈個体／種に必要なこと〉が機能の定義に組み込まれ，それに伴って用途概念が狭まっている。用途概念が限定されたことで，探求すべき器官の範囲が狭まり，解剖を行う積極的な動機が欠落した可能性が指摘できるだろう。

2. アブー・フサイン・バスリーのエピステモロジー　　法貴　遊

アブー・フサイン・バスリー（Abū al-Ḥusayn al-Baṣrī d. 1044. 以下，アブー・フサイン）はバスラのムウタズィラ学派を学んだが，後にその方法論を批判した。本発表は，彼に先行するカラームの学の方法論に対する批判を通して，アブー・フサインが独自の学問体系を構築したプロセスをまとめ，その新たな要素が後のイスラーム思想のいくつかのトポスを先取りしていたことを指摘した。

アブー・フサインがカラームに齎した変化の1つは，知の一形態としてのtaṣawwurの導入である。論理学の伝統において知は，対象の概念表象であるtaṣawwur（表象知）と命題の真偽に関わるtaṣdīq（判断知）に分けられた。古典期カラームでは，知はdhāt ʿalā ṣifa（主語に立つモノが属性を帯びている）という命題形式を帯び，単純な対象の概念表象を持つというタイプの知は不要であった。ここでアブー・フサインは，存在しない対象への「思いなし」という否定的な意味ではあるが，taṣawwurをカラームにおいて初めて専門用語として用い，単純な概念表象という知のタイプを導入した。

ʿilm（知）の定義は，dhāt（然々であるもの）やmaʿdūm（不在者）などの語の定義とも連関する。アブー・フサインによると，然々であるものとは，「それについて知が連関することが可能なもの」である。一方，思いなしの対象は不在者であり，不在者に知が連関することはない。このように，dhātやmaʿdūmなどの術語の定義に知という語が入り込んでいる。アブー・フサインはカラームの体系を，認識論に近づけたと言える。

アブー・フサインによるカラーム批判を通して，表象知と判断知の対比が後のイスラーム論理学の主要な論点となった理由が推測される。古典期カラーム以来，主語に立つモノの存在が確定したその瞬間に，当のモノに特定的な記述を付すという形式が，イスラームにおける「真実を言うこと」の規範となっていたのではないか。

またアブー・フサインは，古典期カラームに反して，偶有がモノとして存在することを否定し，その代わりに物体の「特殊な構造」という概念を導入した。アブー・フサイン本人はその可能性を示唆するにとどまったが，後の彼の学統を継ぐ者たちは，この特殊な構造に四元素を当て嵌めた。特にカイロ・ゲニザに見られるユダヤ教カラームにおいて，その傾向が強い。彼らは，後のイスラーム思想の傾向である，異なる学問群のパッチワーク

的総合を先取りしていたとも言える。

3. イブン・カイイム・ジャウズィーヤのズィクル論　　原　陸郎

本発表では，マムルーク朝期のダマスクスで活躍し，ハンバル学派に属した著名な学者のイブン・カイイム・ジャウズィーヤ（1350年没，以下イブン・カイイム）のズィクル論について考察した。イブン・カイイムの先行研究は，法学や神学に関するものが主であったが，近年では彼のスーフィズム思想についても関心が寄せられている。しかし，これまでの研究では，イブン・アラビー学派のスーフィーたちによる存在一性論を中心とした彼のスーフィズム批判や，彼がどのようにスーフィズムを受容してきたかといった議論に集中してきた。そのため，彼が展開したスーフィズム思想については等閑視されてきたと言える。そこで本発表は，イブン・カイイムが説いたズィクル論に注目し，その理論と実践を検討した。用いた資料は，彼のスーフィズム分野の代表的作品の『修行者たちの階梯（*Madārij al-sālikīn*）』と『二つの遷喬の道（*Ṭarīq al-hijratayn*）』，またズィクルの効能等について論じた『善言の豪雨（*al-Wābil al-ṣayyib*）』の3点である。

イブン・カイイムは，ズィクルには神への讃美や祈願など多くあることを，『クルアーン』やハディースにおける典拠と用法を紹介しながら説明し，その実践を奨励する。そして，どのようにズィクルすべきかについては，①心と舌が一致するズィクル，②心によるズィクル，③舌によるズィクル，の3つの方法があることを示し，1つ目のものが最良であると主張していることを確認した。その一方で，シャーズィリー教団の3代目シャイフのイブン・アターウッラー（1310年没）が説いたと考えられる「単名によるズィクル」と「人称代名詞によるズィクル」については，『クルアーン』の文脈を無視した解釈に基づいたものとして，厳しく非難している。そして，同じくハンバル学派に属したアンサーリー（1089年没）のズィクル論への注釈では，彼のタフスィールやファナーを重要視する態度については批判しながらも，その他の箇所については概ね肯定的な態度をとっていた。以上のことから発表者は，イブン・カイイムのズィクル論は，『クルアーン』とスンナを基礎にもつ伝承主義的なものであると結論づけた。そして，それは当時のスーフィーやタリーカが説いたズィクル実践を意識したものであると推測される。

4. *Jawāmi* と *Jumal*：「アレクサンドリア集成」『原因と症状について』のテキスト伝播に関する考察　　澤　裕章

古代ローマで活躍した医師ガレノス（129–199）の著作選集「十六書」を基に古代アレクサンドリアで成立した「アレクサンドリア集成」*Jawāmiʿ al-iskandarānīyīn* は，現在でも多くの写本が残されている。その中で，スレイマニエ図書館に所蔵されているAyasofya 3609写本の『原因と症状について』*Kitāb al-ʿilal wa al-aʿrāḍ* に相当する箇所には，他の写本とは異なり，*Jumal al-maʿānī*「意味の要約」と題された別種のテキストが混入している。本発表は，*Jumal* の特に翻訳者に着目して，そのアラブ世界への伝播を考察し，初期アラビア世界におけるギリシア医学受容史の実相の解明に貢献するものである。

『原因と症状について』は全6巻から成る著作で，ガレノス医学の教育が盛んであった古代アレクサンドリアでは，理論と実践の架け橋となる作品と見なされ，16点の主要な著作「十六書」およびその翻案書である「アレクサンドリア集成」に収録された。ガレノスによる原典はアッバース朝期に翻訳者フナイン・イブン・イスハーク（808–873）の甥，フバイシュによって翻訳された。一方，「アレクサンドリア集成」は現在ギリシア語原典が失われており，フナインに帰される翻訳とそれから訳されたヘブライ語訳とラテン語訳が現存している。

写本の奥付によれば，*Jumal* が含まれるAyasofya 3609写本は1242年にアッカでジルジースという人物の手で書かれたもので，*Jumal* の箇所は，10世紀のダマスカスの医師ヤブルーディーの手によるものである。同写本は，奥付や註の情報から判断すると，1240–41年にアッカで作成されたManisa 1759写本と共通の写本から引き写された。しかし，Manisa写本の *Jumal* に相当する箇所には，本来の *Jawāmiʿ* のテキストが収められていることから，

*Jumal*は共通の写本からではなく，別の写本から引き写されたことが分かる。

*Jumal*の冒頭には，翻訳者としてイスハーク・イブン・フナイン（830年頃–910/1）が挙げられ，イスマイール・イブン・ブルブル（844/5–892）に向けた翻訳であると書かれている。一般に，イスハークは，天文学書や数学書の翻訳で活躍し，医学での目立った功績は少ない。同様の献辞が，天文学書『アルマゲスト』の写本Bnf. Arabe 2482にも見られ，そのタイトルも*Jumal*で共通している。また，後者の献辞に現れるサービト・イブン・クッラは両者と親交があったことから，サービトを介してイスハークとイブン・ブルブルが交流していたと推測できる。本発表では，以上の情報から*Jumal*がイブン・ブルブルの依頼を受けてイスハークが翻訳した可能性が高いと結論付ける。

5.　モッラー・ファナーリーにおける神名，人間，星辰魔術　　中西　悠喜

12–13世紀スペインの神秘家イブン・アラビー（1240年没）は，存在顕現の世界観を基礎づけ，のちのイスラム圏の精神史に絶大な影響をあたえた。一なる絶対者から多なる世界が発生し，その全動態を「完全人間」が包蔵する。この根本直観を，かれの支持者たちは「存在一性論」として体系化していく。先行研究も指摘するとおり，アラビア哲学の伝統がここで重要な役割を担った。しかしイブン・アラビー派の多様な展開は，単純な哲学化プロセスとしては記述できない。本小論はこのような観点から，14–15世紀の同派神学を代表するモッラー・シャムスッディーン・ファナーリー（1431年没）を取りあげ，かれの宇宙＝人間の発生をめぐる諸議論が星辰魔術の影響下にあったことを指摘した。

星辰魔術は占星術を基礎におく魔術である。術師は目的（怪物や特別な人間の人為的生成までを含む）におうじ，特定の惑星のエネルギーを地上の護符に込める。ゆえに護符は「天界の力と大地の力を混淆するもの」と定義される。ファナーリーは主著『親密の灯』において，この理論をイブン・アラビー派の宇宙論・人間論一般に適用する。かれによれば，神はいくつかの根源的な名を有する。それらは時々の星位に影響され，相互に反応する。そのなかで他のさまざまな神名が生まれ，世界のすべてが顕れる。ファナーリーの理解では，人間は顕現の過程で，天と地のすべての力を包蔵するにいたった例外的な存在とされる。換言すれば，人間は皆，星辰魔術の護符として生まれてくるのだ。

ファナーリーが活動したのは，中世末期・初期近代のアナトリア，シリア，エジプトである。近年の研究によれば，この時代の東方イスラム圏はヒジュラ暦1000年を目前に控え，一種の千年王国思想に沸き返っていた。占星術，魔術，数秘術のような，いわゆる「オカルト諸学」が隆盛をきわめ，自然探究，聖典解釈，預言者論などと結びついた。ファナーリー自身も，こうした秘教的知を探究する「新純潔同胞団」の一員だったことが記録されている。特異な時代精神のなか，かれはイブン・アラビー派の宇宙論・人間論に新たな魔術的次元を拓いたのだ。